Scientific Fantasy ＳＭ

ＸＸＹｚの悲劇

濠門長恭

目次

たったひとつの冴えたやりかた.....- 3 -
果しなき流れの果に.....- 6 -
何かが道をやってくる.....- 34 -
世界の中心で愛を叫んだけもの　－ 54 －
冷たい方程式　－ 84 －
地球の長い午後　－ 88 －
愛はさだめ、さだめは死　－ 115 －
スポンサーから一言　－ 122 －
愛に時間を　－ 125 －
後書き　－ 129 －

この作品の舞台は、太陽系から約３０光年の彼方にある惑星エデンです。

エデンの自転周期は約１８時間、公転周期は約５４０エデン日です。

１エデン年＝１８×５４０÷（２４×３６５）＝１．１１地球年になります。

したがって、エデン暦で「１６齢」の登場人物は地球年齢で「１８歳以上」です。

※ゆえに……この小説に登場して、センシティブな場面に関わる人物は、すべて地球年齢で１８歳以上の成人です。通行人Ａなどはこの限定の範囲外という意味です。

※各章題は有名なＳＦのタイトルを拝借していますが、内容とはほとんど無関係です。

※この小説はフィクションです。実在する／した如何なる星系・国家・団体・人物・年齢とも関係はありません。

たったひとつの冴えたやりかた

惑星エデン　性資源開発計画

総　論

第三千年紀初頭の低迷を経て、人類は地球外への進出を本格化し、第二四半紀に至ると太陽系外への膨張を開始した（西暦二千三百五年～）。未だ次元縮退技術を持たぬまま、亜光速による進出は百光年に達した。しかし、光速度の限界により十全の支援を得られずに、あるいは同じ理由による事前調査の不備で、撤退、孤立、全滅の悲劇に見舞われた植民星も幾つかあった。

太陽系から三十光年の距離にある惑星エデンも、そのひとつではあったが、そこに待ち受けていた困難は類を絶するものだった。惑星全体に遍在する微小結晶体である。以下、現地亜人に倣い、これをＰＣ（Pico Crystal）と称する。

ＰＣは地球型哺乳類のＤＮＡを選択的に侵襲する。特に、性別を決定するＹ染色体を侵襲した場合には、その作用は致命的である。ＰＣは自己増殖を繰り返しながら他の染色体にも侵襲して、細胞の活動を阻害し構造を破壊する。成長を終えた成体に感染した場合は致死までに十数年を要するが、胎児に感染した場合は概ね死産に終わる。

救援要請が太陽系へ達して、緊急派遣船団が到着するまでに、約八十年が経っていた。

孤立した場合には技術水準が低下するのは自明の理であるが、植民者たちは将来的に予想される人口規模と惑星エデンの環境を考慮して、それを第二千年紀末のレベルであろうと予測した。緊急派遣船団が到着するまでに彼らは、その水準でも維持可能な解決手段を発見実行していた。それは、ホモ・サピエンスのアイデンティティを根幹から揺すぶる、

禁断の遺伝子改変であった。

Ｙ染色体の活性化を抑制する（必然的に名付けられた）ｚ因子の組込である。性決定遺伝子にＸＹｚを持つ個体は、第一次性徴としては雌形で発生する。第二次性徴では、不完全ながらも受胎可能となる。若干の個体差はあるが、三十齢前後で第三次性徴を迎えて、数年のうちに、不完全ながらも生殖可能な雄形に変態する。古記録では、成人男子が感染した場合の平均余命は十年程度であるが、変態後の雄形は十五年乃至三十年を生き延びる。このあたりの機序は、未だ不明確である。

遺伝子改変によって生み出されたエデンの現住種は、みずからをホモ・メタモルフォセスと名乗り、ホモ・サピエンスと峻別している。

ホモ・サピエンスの側としては、禁断の遺伝子操作によって捏造された生命を許すわけにはいかず、救援に駆け付けたはずの統合政府宇宙軍は彼らのジェノサイドに踏み切った。

しかし、宇宙軍を掣肘するシビリアンＡＩは、ｚ因子はいわば「外付け」であり、遺伝子の改変には当たらないという、牽強付会ともいうべき結論に達して、ホモ・メタモルフォセスの存続を認めた。

惑星エデンは、ホモ・メタモルフォセスの存在以前にＰＣによる汚染が致命的であるとして、厳重に封鎖隔離され、一切の記録も封印された。

以上が、我がチームが発掘した、植民当初からおよそ八百年前までの、概ね正確な歴史である。

惑星エデンを含む星系には、採算ベースに乗る工業資源は存在しない。ＰＣ感染のリスクを冒して再開発するメリットもない。宙政学的にもまったくの僻地である。

しかしながら、ホモ・メタモルフォセスは人類ではなく、かつ、外地球知性体でもないのであるから、『汎生命体保護法』さえ遵守すれば、如何なる用途に使役しても問題はないというのが、Legal dept. の見解である。

ホモ・メタモルフォセスの雌形が発達した副乳を有するという点は、著しく需要を狭めるであろうが、彼らがホモ・サピエンスではない明確な証拠という点では有利でもある。

ことに、実験体ＡＧＲタイプは、その希少性から極めて高い付加価値が見込める上に、三十齢以前に自然死を迎えると推測されるので、回収後の飼育コストがほとんど掛からないというメリットもある。

Force Millennium R&R Company

Sextant division

Alteroid research team

果しなき流れの果に

　目を開けていられないほどの眩しさ。現実にはあり得ないほどの透き通った青い空。千切れた綿のような物が宙に浮かんでいる。

　ああ、いつもの夢だ――メル・ジーン・ライアンは、はっきりと認識する。大地は鮮明な緑と土に覆われ、散在する岩石さえ光り輝いている。それは、博物館にわずかに遺されている古地球の風景だ。柔らかな、ときとしては陰鬱な、ときとしては軽快な、桃色の雲からこぼれる陽光ではなく、鋭い白色光に照らし出された絵画。子供時代の記憶。

　だから、これは未知夢ではない。それは分かっているのだけれど。

『健康な生と安らかな死を望むか？』

『屈辱とそれを上回る安逸を求めるか？』

『苦痛とそれを上回る快楽は欲しくないのか？』

　頭の中へ直接に語りかけてくる声。

　健康な生と安らかな死は、誰もが望むだろう。

　屈辱にまみれながら半ば放浪生活を送っている彼女は、何よりも安逸を求めている。

　肉体的な苦痛を与えられることも珍しくないのであれば、せめてその代償は欲しい。

　しかし……

『健康な生と安らかな死、安逸と快楽。それを欲すなら、理力に服従せよ』

　服従という単語に、隷属と搾取と虐待が見え隠れしている。

「いやだ！」

　メルは叫んだ。繰り返し見る悪夢は、それで砕け散るはずだった。しかし、今日に限っては続きがあった。

『……ならば、このまま旅路を辿ってみよ。汝は次の街でレインボウ曲技団を目の当たりにするであろう。そして、思い知るが良い。汝の同類が、如何に惨めな生を生きているか。それを見よ。それを知れ。それを味わえ』

そこで、ようやく――メルは目を覚ました。夢見が悪かったせいか、薄桃色の陽光が淀んでいる。

メルは寝床を出て窓辺へ行き、東の空を見上げた。一面のべったりした灰桃色の天空。それが分厚い雲だという知識はあるが、雲にふさがれていない空というものは見たことがない。

予想していたとおり、それはそこにあった。太陽光の透過ではない。光の球が、雲の中で跳ね回り転げ回っている。

雷のたぐいらしいということになっているが――このような現象が目撃されるようになったのは、ここ半世紀くらいということだ。ホモ・メタモルフォセスの歴史は約八百年。それに先立つホモ・サピエンスを含めても一千年に満たない。未知の長期的な気候変動なのかもしれない。

しかし。メルがいつもの夢を見るのは、この未確認発光体ＵＬＯが出現した前後に限られていた。気圧の変動や空間電位の異常とかが影響しているのだろう。集団的夢意識の顕現とか、ホモ・サピエンスからの警告といった神秘主義的な解釈には与しない。

それよりも……。

相部屋の三人は、まだ眠っているが。若干の胸苦しさと馬車への乗車拒否とを天秤に掛けるほど愚かではない。むしろ、胸に巻いた布をちょっと引き上げて、確実に乳房を押し潰した。

乳房が双つしかないから、それがどんなに大きくても、男性への偽装は、それほどに難しくない。乳房を下へ向けて潰していけば、胸筋が発達していると思われるだろうが、四つの乳房を圧し潰しているようには見えないだろう（というのは、希望的観測だが）。でき

るだけ低い声で喋るようにしていれば――ひとり旅の女が、邪心を起こした男に乳房をつかまれて、下の双つが詰物だと気づかれるよりも危険は小さい。

男性化してからも便器に座って小便をする者も少なくはないが、安宿の便所に個室の扉は無い。正面から覗かれれば、幼児並みに小さな淫核しかない股間を見られてしまう。メルは足音を忍ばせて部屋を出ると、大急ぎで用を済ませた。

浴槽と便所付きの一人部屋に泊まる余裕があるなら、なにも乗合馬車なんか使わずに汽車で行く。

前の街では、四か月を暮らせたけれど。サピエンス返りの忌むべき存在と暴露されて、わずかな財産さえも貸部屋に置き捨てて身ひとつで逃げ出したのだから、小さな町で臨時雇の仕事にありついて当面の銭を稼いだ後は、噂が追いつく前にと、こうして北西へと放浪している。

これから行く街では、月単位で雇ってもらえるだろうか。流れ者に部屋を貸してくれる親切な大家に巡り会えるだろうか。

そんな不安ばかりを抱えていても、ドッツ三十五も払わされた朝食を、売れ残りや廃棄品を寄せ集めて自炊する食事よりは、ずっと美味に堪能する裕りまでは失っていなかった。

一ギルぽっきりの乗合馬車で、八時に出発して十一時にはドライバーグに到着した。とりあえずは、乗合馬車組合で紹介してもらった「とにかく安い」宿を取って。中途半端な時刻だったので、暇潰しのつもりで、街外れに大天幕を張っているレインボウ曲技団を見物に行った。

夢のお告げなんかではない。事情は逆で――前の宿で宣伝の張出紙を目にして、だから夢に出てきたのだ。

平日だから、そんなに人は集まっていなかった。興行も十四時から夜の十七時までの一回限り。週末の二日間は、八時から十二時と十三時から十七時の二回。演目を増やしているのだろう。終演が真夜中十八時の一時間前となれば、興奮冷めやらぬまま寝床に就くこ

とになる。翌朝は寝坊しかねない。

大天幕へ続く道の脇には、演し物の看板が並べられている。空中ブランコや綱渡りは定番だが、原動機付二輪車の宙返りは珍しい。鳥人間なんて、絡繰があるに決まっている。

それらよりも目立つくらいなのが、拳銃と爆竹を並べてバッテンが描かれている立札。爆竹なんか持ち込むのはごく一部のガキくらいだが、拳銃となると五人にひとりは常時持ち歩いている。だから、「持ち込むな」ではなく「使うな」という意味だ。

メル自身は持っていない。荷物の中に忍ばせてもいない。武器を所持していて最悪なのは、危害を加えようとする相手にそれを突き付けて、しかし使わないことだ。けれど発砲して相手を傷つければ、保安官なり自警団に正当性を証明しなければならない。その過程で、絶対に隠し通さねばならない秘密を暴かれる危険を冒すくらいなら、素直に（ごくわずかな）全財産を差し出すほうが、まだしもだった。

そのわずかな財産をさらに減らすような無駄遣いはしたくない。冷やかしだけのつもりだったのだけれど。大天幕の手前に幾つもの檻が並べられていた。虎、大型犬、蛇女……。

蛇女の檻には『メデューサ』の名札が掛けられているが、髪の毛が蛇というわけではない。檻の中に淫らな姿で寝そべって、体長が一メートルほどの蛇を数匹、裸身に這わせている。

古地球から持ち込まれた生き物ではなく、この惑星の原産種だ。他に似た生物がいないから『蛇』と呼んでいるが、姿形から言えば脚無し芋虫の名がふさわしい。『虎』も同じ。

しかし、愛玩用の犬や猫、畜産用の牛馬などはホモ・メタモルフォセスと共通の遺伝子を持っている。つまり、古地球から持ち込まれた。そして、現存している地球種生物はすべて雌である。繁殖は、卵細胞Ａの核を使って、卵子Ｂを受精させる。ＡとＢは別の個体から採取するのが大原則。

この技法は、まったく遺伝子操作に当たらない。なぜホモ・サピエンスは、この方法を自身に使わなかったのか。それは遺伝的多様性という生物学上の問題ではなく、文化人類学上の命題であると、教師は生徒たちに教えている。産み育て支配と引き換えに保護され

る女性と、産ませ養い庇護の見返りとして支配する男性と。

正と反があってこそ、合が生まれる。だからこそ、一生のうちに女性と男性とを体験できるホモ・メタモルフォセスこそ完全な人間なのである。

自分はまったく不完全だと、メルは卑下して悲観する。

しかし、この場にある『不完全』は変態（metamorphosis）に関わる事柄だけではなかった。道を挟んで『メデューサ』と向かい合った檻の名札は『ケルベロス』となっている。

メデューサより年上に見えるが、それでも二十代後半だろう。彼女も全裸で、前脚を上げた犬の格好を真似ている。開いた後脚の付け根には、もちろん女性器が見えているのだが――彼女に向けられた視線は、もっと上に集まっていた。

彼女には乳房が八つもあった。十二、三の少女の上乳くらいの大きさ。あるいは成人女性の下乳よりも小ぶりな――均等な大きさの乳房が左右二列に並んでいる。つまり、犬や猫の乳を連想させられる。頭が三つあるわけではない。

これは、単に異形と呼ぶにふさわしい。昔だったら、誕生と同時に間引かれていただろう。ホモ・メタモルフォセスの性決定遺伝子には不安定の要素が残されている。ＰＣへの防波堤を護るためには、個別の命を犠牲にするのもやむを得ない。

この女性も、もう四半世紀くらい前に生まれていたら、そういう運命を辿っていたはずだ。そうならなかったのは、メルの生まれ故郷デフォルマンタを中心に広まっていった、新しい迷信もしくは信仰のおかげだろう。

異形は通常の受精卵よりも高濃度のＰＣに汚染したから生じた。もしも異形児を間引いたりしたら、そのＰＣは人体に馴染んでいるから、どれだけ離れていても近くの人間をさらに汚染するだろう。たとえ死体を火葬にしようとも。つまり、人間扱いをしようとしまいと構わないが、とにかく生かしておかなければならない。誰が言い出すともなく、そんな迷信が広まっていった。

あるいは、デフォルマンタでは他の地域に比べて多くの異形児が（死産を含めて）生ま

れていたから、我が子を殺すに忍びない親の願望が土台にあったのかもしれない。

しかし、それにしても。よくぞ殺されなかったものだ、死ななかったものだと――自身がサピエンス返りの異形であるメルでさえ戦慄したのが、ひとつ奥の檻だった。『アラクネ』の名札が掛けられたそこには、手が四本と足が四本の女性が入れられていた。

普通の体格の女性が低い姿勢で四つん這いになって、その背中に、ひとまわり小柄な娘が仰臥しているだけのようにも見えるが、二人の背中から腰までが癒着しているのは明らかだった。上の娘が手足を反らせて床に着けているので、まさしく蜘蛛の印象だった。

その向かい側の檻は『アンドロギュノス』。見た目は、美少女そのものだった。しかし無毛の股間には、淫核にしては大きすぎる肉の棒がぶら下がっている。

サピエンス返りの女に欲情する男など（すくなくともメルの体験では）いなかったし、男に偽装してからでも細心の注意を払ってきたから――幼時のおぼろな記憶しかないのだが。その美少女の肉棒は男性器と断言しても良い。

可哀想に――というのが、メルの感慨だった。おそらく十五齢くらいだろう。男性化してからの余命は二十五年くらい。生まれたときから男性化していたのなら、あと十年も生きられないのではなかろうか。

少女――古語で少年（boy）と呼ぶべきだろうか。少年は檻のまわりに集まっている見物客を見回すと、縦格子に寄りかかって身体を支え、片足を斜めに引き上げてＹ字形を作った。

「おおおっ……！」

「えええっ……？」

「女性器……？！」

会淫にあたるそこはすこし膨らんでいて、その中央には縦に深い亀裂が生じていた。

少年は妖しく微笑むと、空いているほうの手で亀裂をまさぐり――三本の指をひとまとめにして、そこへ挿入した。化粧でそれらしく見せかけているのではなく、本物の穴。紛

れもない女性器だった。

少年は上げた足の甲を格子に絡ませて身体を支え、足首をつかんでいた手を放して小ぶりな乳房を揉み始めた。女性器に挿入している指も、くねくねと動かす。

「あああん……誰か、ギュノスを慰めてよお。アンドロを虐めてもいいよ」

細身の筒袴に燕尾服を着た男が檻の裏から横へ回り込んで、手にしていた鞭を格子の隙間へ飛ばした。

ピシイッ！

「痛いっ……！」

尻を打たれて、少年が悲鳴をあげたのだが。メルには馴れ合い芝居のように見えた。

「小さなお子さんもいらっしゃるんだ。場所柄をわきまえろ」

「ごめんなさい……」

少年は上げていた足を下ろして、男に向き合った。両手を頭の後ろで組み、腰を突き出して脚を開く。

「アンドロは悪い子です。お仕置きをしてください」

「ふふん……」

男は一歩下がると鞭を下手に構え直して。

しゅんんっ、ビチイン！

少年の股間を斜めに掬い上げた。

「きゃあああっ……！」

少年は両手で股間を押さえてうずくまった。そのまま、動かなくなる。

「後ろがつかえております。皆様、先へお進みください」

立ち止まって眺めていた客が燕尾服に促されて動き出すと、少年はけろりとして身を起こす。

道の両側に並んでいる檻が尽きると、巨人が立ちはだかっていた。身長が百七十センチもあれば大男と目されるのだが、この男は優に百九十センチはあろう。胸板に『コロッサ

ス』とじかに描かれている。左足を一メートルほどの鎖で、道端の杭につながれている。見世物の一人なのだろうが、この男だけは短い下穿きを身に着けていた。

「がおおおおお」

両手をゆっくりと振り回して、通り抜けようとする者を脅かす。男を避けようとすると、自然に大天幕のほうへと足が向いてしまう。

大人四人が並んで通れる広い入口の左右には棒が立ててあって、九十センチと百二十センチのあたりに線が引いてある。

「いらっしゃい、いらっしゃい。もうじき開園だよ。おひとり様たったの一ギルドッツ五十。上の線より背の低いお子さんは一ギルぴったり、下の線よりも低ければドッツ五十でよろしいですよ」

紅白縦縞模様の衣装を身に着けた道化師が、客を呼び込んでいる。親子四人で見物しようとすれば、五ギルばかりかかる。日雇人夫の日当に相当する。

メルはちょっとだけ迷ってから、入場料を払った。大男をかわすのは難しそうだし、身体に触れられたくはない。それに……異形の者たちがどんな芸を披露するのか、興味が無くもなかった。姿かたちこそ違え、同じ異形である者への同情、あるいは好奇心、それとも自分のほうがまだしもだという優越感。そのいずれとも分からないのだけれど。

大天幕の中は、中央の演舞場を半円形に囲んだ雛段になっていて、五百人は収容できそうだった。すでに興行は一週間に達して、見飽きた者も少なくないのだろう。客の入りは半分くらいか。

待つほどもなく、燕尾服の男が演舞場に現われる。

「紳士ならびに淑女の皆様。本日はお忙しい中にもかかわらず、レインボウ曲技団に御来訪いただき、まことにありがとうございます」

拡声器を使って、天幕の隅々まで響き渡る音吐朗々。

紅白衣装の道化師がちょこまかと現われて。燕尾服の男が持っている収音器に顔を寄せると。

「今の挨拶は、金を払って入場したやつにだけだぜ」
「こら、なんてことを言う」
　すたこら逃げる道化師を追って、燕尾服も袖口へ退場。
　入れ替わりに、左右の花道から四頭の仔馬が足並みをそろえて入場。身体の線を浮かび上がらせた全身肌着に短い裳裾を着けた少女が騎乗している。半円形になって客席に向き直ると、仔馬が前脚を折り曲げて挨拶。
「みなさま」「ようこそ」「いらっしゃい」「ました」
　声を張り上げてはいるが肉声なので、後ろのほうでは微かに聞き取れるくらい。
　ぱちぱちぱちとまばらな拍手。
「ハイッ！」
　四人の少女が鞍の上に立ち上がり、軽快な伴奏の中、手綱を放して仔馬を疾走させる。砂塵を蹴立てて走る仔馬の上で、一斉に逆立ち。からの空中転回。ぴたりと決まって。そこで鞍に座り直して。二頭ずつに分かれて、今にもぶつかりそうな間隔で演舞場を直角に走り回る。
　固唾を呑む五分ほどの演技。
　最後に左右の花道に分かれて、二頭ずつが棹立ち。その頭上には、いつの間にか準備を整えていた空中ブランコ。左右に一人ずつと、奥から手前へ揺れるブランコにも一人。左右の二人は二十前後の娘。中央はかなり年配の男。
　三人がいっせいに踊り場を蹴って宙に舞う。数回はずみをつけてから、左右の娘がブランコから手を放して。男がその間を通り抜けざまに娘の手をつかんで左右に放り投げる。見事にブランコを入れ替わった。
　万雷の拍手。
　地上に安全網は張られていない。失敗すれば地面に叩きつけられて大怪我――にはならない仕掛はあるのだが、それを知らない観客も少なくない。
　おもに二人の娘が曲乗りをして、男はその中継点になったり、小道具を受け渡したり。

十分ばかりの演技の後で、また四人の曲馬が披露されて。そこで小休止。裏方だろう男たちが客の間を縫って、飲み物やら菓子を売り歩く。軽い泡酒も売っている。

休憩の間に、演舞場の奥に高い櫓が設置される。

「それでは皆様。こればかりは他の曲技団ではお目に掛かれない、一切の裏絡繰が無い、正真正銘の鳥人間。アマンダとミランダの、驚異の空中飛翔をご覧ください」

伴奏が始まって。二人の若い娘が櫓へ登っていく。天辺の踊り場に立ったときには、折り畳まれていても腕の長さの五割増しくらいの翼を肩から装備していた。

伴奏が小太鼓の連打に変わって。

「ハイイッ！」

二人が踊り場を蹴って、左右に分かれて宙に浮かんだ。０．８Ｇの重力は、翼を背中に折り畳んだままのふたりを無慈悲に落下させる。そして、地上から五メートルほどのあたりで。バササッと翼が展張した。蝶番と梃子の組み合わせで、翼長は身長の三倍ほどにも達している。

ぎゅううんと鋭い弧を描いて、それでもふたりが地面に激突したと見えた刹那。

ドジャアン！

金属打楽器の音と共に、ふたりは地を蹴って宙に舞い上がる。翼を傾けひねって、大天幕の内側すれすれを旋回しつつ速度を殺して。見事演舞場に降り立った。

観客総立ちで拍手喝采。

気球や飛行機は知られているが、脆弱で複雑な構造を維持する費用に比べて、有料荷重はきわめて小さい。汽車の運賃の何十倍も払って、天候によっては飛べない航空機で旅をしようという物好きはごく少ない。大陸の真ん中で新鮮な海魚を食したいからと、百人分の正餐を賄える金額を支出する数寄者も、まあ、皆無ではないのだが。

つまり。空を飛ぶことは、それだけで見世物になる。それを、生の肉体で演じるとなると、神無き世界での奇跡だった。

ふたたび、売子が観客の間を歩き回る。

「おおっと……ごめんよ！」

観覧席の最後方に座っていたメルは、斜め後ろからぶつかられて、泡酒を頭からぶっ掛けられた。ずぶ濡れ。

「うわあ、申し訳ない！」

前も左右も振り向く大声。ぶつかったのは、泡酒の樽を胸元に括りつけている売子だった。両手に泡酒を満たした大杯を持って、そのひとつをメルにぶちまけてしまったのだ。

「申し訳ありません。すぐに着替えをご用意いたします。こちらへお出でください」

「いや、気にしないでくれ。これくらい、すぐに乾くだろう」

「いいええ。お客様に御迷惑を掛けたとあっては、当曲技団の名折れです。どうか、楽屋までお越しください。すぐに、お召し物の替えを用意させていただきます」

出入口に近いせいか、たちまち数人の裏方が馳せ参じて、メルを取り巻いた。

仕方がない。替えの服はともかく、場所を変えてあらたまった謝罪を受けてあげれば、彼らの心も安らぐだろう。何よりも、メルは人目に立つことは避けたかった。

売子に後押しされるような形で、メルは団員の通用口へ案内された。左右にも裏方がついて――見方によっては、逃がしてなるものかといった構え。

大天幕とつながっている楽屋の天幕も、かなりに広かった。片隅には六頭の仔馬がつながれているし、その向かいには原動機付二輪車が木箱に立て掛けられている。

「いや、申し訳ない。すぐに着替えを用意するので、まずは濡れたお召し物を脱いでください」

燕尾服の男が、慇懃に申し出る。この男が責任者――団長らしい。

「いや、それには及ばない。混雑していたのだから、仕方がないでしょう。謝罪は受けました。もう、次の演目が始まる頃ですね。見物に戻りますよ」

メルはきびすを返しかけたのだが、壁のような胸板が後ろに立ちはだかっていた。見世物になっていた巨人だった。

「服を脱いでくれって言ってるんだ。男なら羞ずかしくもないだろ」

団長の口調が変わっていた。いや、それよりも――おまえは男ではないと決めつけているような口ぶりだった。
「私は客だぞ。無礼にもほどがある」
巨人の脇をすり抜けようとしたが、肩をつかまれて引き戻された。
「手荒な真似をせんけりゃ、埒が明かないようだな」
団長がメルの胸元に手を伸ばす。逃れようにも、巨人に羽交い絞めにされて、身動き取れない。
団長はメルの上着をつかんで、釦が飛ぶのもかまわず強引に胸元を引き開けた。襟を背中までずり下げて、襯衣を引き千切る。乳房を潰している布が露出した。
「へええ。面白いことをしてるんだな」
「私は、もう三十だ。まだ閉経しないのが恥ずかしくて、乳房を隠しているんだ」
実際には三十二齢。その年齢なら閉経どころか百人中九十九人が繭化している。
「そりゃ、まあ、そういうこともあるだろうがな。おまえの副乳は、ずいぶんと上に付いてるんだな」
団長は裏方のひとりが差し出した鋏を受け取ると、一気に布を裁ち切った。上乳と副乳をひとつにしたよりも大きな左右一対の乳房が転び出る。
ヒュウと、団長が口笛を吹く。
「やっぱりか……こいつは、とんだ偏端。いや、サピエンス返りか」
「さすが、団長の未知夢は百発百中ですねえ」
鋏を手渡した男が、お追従というよりは事実なのだろう。
団長は、メルがサピエンス返りの異形だと事前に察知していて、単純な罠で誘い込み、その正体を暴いたのだった。しかし、なんの為に？
「私をどうするつもりだ。殺すのか。それとも、群衆の中に投げ込むつもりか」
後者であれば、さまざまに辱めを受けた挙句に殺される。サピエンス返りへの嫌悪は、ＰＣ過剰感染の恐怖よりも強い。

「まさか」

団長は薄笑いを浮かべて否定した。

「逆だよ。おまえを保護して、食うに困らなくしてやろうってんだ。檻に閉じ込められてるやつを嬲り殺しにするような市民はいないからな」

「……！」

メルは、はっきりと団長の意図を悟った。蛇女、蜘蛛女、犬女、巨人、両性具有。そこに、サピエンス返りの女を加えようというのだ。全裸で檻に閉じ込められて見世物にされて……両性具有の少年みたいな淫らな真似をさせられるかもしれない。鞭打たれるかもしれない。

「殺せ！」

メルは叫んだが、声を弱々しかった。

『健康な生と安らかな死』

今朝の夢を思い出した。それが叶えらえるのではないか。

『屈辱とそれを上回る安逸』

見世物にされるのは屈辱の極みだが、ただそれだけで生きていられるのは安逸ではないだろうか。

『苦痛とそれを上回る快楽』

少年の言葉がそれを仄めかしてはいなかっただろうか。

「ギュノスを慰めて。アンドロを虐めて」

こういった見世物興行の芸人は春を売る者が多いと聞いた覚えがある。配偶者を相手としては出来ない変態的な行為も、ままあるとすれば――それに馴れてしまえば、苦痛と快楽。そういうことだろう。

しかしもちろん。受け容れられる話ではない。異形だろうとサピエンス返りだろうと、人間には違いないはずだ。自身の尊厳を投げ捨てるなど、絶対に肯んじられない。

団長の言葉をきっかけに夢を思い出して、とっさにそこまで考えるというのは――メル

も、あれをただの夢とは思っていない証拠かもしれない。迷信めいた未知夢ではなくとも、心の奥底にある願望の暴露。

団長はしかし、メルの逡巡には気づかず、言葉を拒否と受け取ったようだった。

「望み通りに殺してやろう。おい、コロッサス」

声を掛けられて、巨人はメルを突き飛ばした。地面に転がったメルを押さえ込んで、衣服を引き千切る。そして。

「うへええ……なんとも、気味の悪い身体ですぜ」

ホモ・メタモルフォセスの雌形は、雄形に変態する余地を残して、生殖器官は乳房を含めて十全に発育しない。博物館にわずかに遺されているプラスチック板の線刻画が正確な模写であるのなら――繭化する直前の三十齢を過ぎた雌形でも、ホモ・サピエンスの十五歳か、もうちょっとだけ成長したあたりの体型に匹敵する。

しかし、サピエンス返りしたメルは、ホモ・サピエンスの成熟した雌形に近い。異常に丸みを帯びた身体の線と、美的基準の五割増しはあろうかという乳房と尻。背丈も百六十センチを超えている。なによりも、その巨大な乳房が双つしか無いというのは――人間の目には、両腕の無い女よりも醜く感じられるのだった。

もっとも。第三次性徴を経て雄型に変態したホモ・メタモルフォセスは、ホモ・サピエンスに近い体格になっているので、体格の釣り合いから見れば、メルこそが媾合にふさわしいのだろうが……ただの一例で八百年の価値観が覆るはずもない。

「それでも、やっつけろ。御婦人方をひいひい善がらせてきた、そのでかいチンポの味を教え込んでやれ」

「そりゃ、まあ……仰せの通りにやっつけたいところですがね」

巨人は下穿きを脱いで、男性器を露出させた。博物館の所蔵品からは、勃起した男性器の大きさまでは分からないのだが――萎えているときのそれは、ホモ・サピエンスに匹敵する巨大さだった。

それでも、この巨人は確実にホモ・メタモルフォセスだった。三十齢で繭化する前は、

ごく普通の（かなり大柄な）女性だったのだから。

巨人はメルの髪の毛をつかんで引き起こし、その巨大な男性器を口元へ突き付けた。

「しゃぶってくれよ。いい目を見させてやるからよ」

いい目どころか。

そういう機会から徹底的に逃げていたメルでも、性交時には男性器が勃起することくらいは知っている。今でさえ膣穴の三倍くらいは太く見えるのに、これがさらに大きくなったら――そんな物を挿入されたら、運が良くて裂傷、下手をすると大怪我をさせられかねない。

「おら、口を開けろつってんだよ」

巨人はメルの顎をつかんでぎりぎりと締め付ける。それでも、頑なに口を閉ざすメル。

どすんと腹を蹴られて。

「ぐふっ……」

呻いて半開きになった口へ、生温かい肉棒が突っ込まれた。

「噛むなよ。拳骨をぶち込んで歯をへし折ってやるぜ」

まるで、太い腸詰肉を口いっぱいに頬張らされたような感触だった。それも、腐って異臭を放っている。両手で巨人を押し返そうとしたが、びくともしない。

「ぼさっと咥えてるんじゃねえ。しゃぶれ。舌を絡ませろ」

命令しながら、その実行を待ったりはしない。メルの頭を両手で抱え込んで腰を前後に突き動かす。

「んぶ……もぼおお」

顔に下腹部を押し付けられて、淫毛が目に突き刺さり鼻腔をくすぐる。喉の奥まで腸詰肉が突っ込まれて、吐き気が込み上げる。

「むぐ……むううう」

激しい抽挿。しかし、腸詰肉が固くなる気配は無かった。

メルは五分ほども口辱されて……不意に解放された。

「面目ねえ。目をつむってみたんだが、ぶよぶよした肉塊が頭に浮かんで、どうにもならねえや」

チッと団長が舌打ちする。

「となれば……別の説得を試みるか。それとも……そうだ。アンドロを連れて来い」

まさか、双つしかない乳房を人目に晒して逃げ出したりはしないだろうが、用心のためだと、メルは縄で縛られた。それも、次の場面への準備だからと――仰向けにされ足を折り曲げられて、左右別々に手首と足首をひとつに括られた。いきおい膝が立ち脚は開いてしまう。

これも準備だとうそぶいて、団長はメルの着衣を下着にいたるまで切り裂き剥ぎ取った。濃密な淫毛に覆われた女性器が剥き出しになる。

「へええ……ガキよりも小さいぜ」

メルのまわりには、団長と巨人だけではなく、手すきの男どもが群がっている。曲技団の花形である娘たちは、さすがに隅へ逃げていたが。

その野次馬のひとりが、メルの股間をあからさまに指差した。

ホモ・メタモルフォセスの淫核は、成人の人差し指の第一関節から先よりは大きく長い。これが第三次性徴で肥大伸長して、膣への挿入に耐える淫茎になる。しかしメルのそれは、小指の爪ほどの大きさもなかった。完全な雌形であり、ホモ・メタモルフォセスとしては異形だった。

「くそっ……見るな！」

「やかましいな。口をふさいでおけ」

手ごろな布があったとばかりに、ずたずたにされた下着を丸めて口に突っ込まれ、胸を潰していた布で頬をくびられた。

元より、メルには大声で救けを求めるつもりなどなかった。人が集まれば、十のうち九までは、彼女への迫害が始まる。巨人が示した反応が普通だから女性への凌辱ではなく、おぞましい存在に――石を投げつけるか棒で叩くか火を押し付けるか。おそらく、そのす

べて。

　すぐに両性具有の少年が連れて来られた。

「おまえなら、こんな偏端者でもいけるだろう」

「メデューサともケルベロスとも媾合ったんだものね」

　空中ブランコ乗りの娘が、軽蔑しきった口調でからかって、ふたりで含み笑いを交わす。

　少年はふたりを無視して、団長におもねる。

「出来ると思いますけど……僕のちっちゃなチンポじゃ、言い聞かせにはならないんじゃないでしょうか」

「縄を使え。それでも駄目なら『北風』の出番だ」

　四千年昔の古地球の物語も、この地で語り継がれている。だから、分厚い桃色の雲に覆われた惑星に生まれ死んでいく者でも、その向こうに直視能わぬほどに光り輝く太陽があることは知っている。それはともかく。

「そう……」

　少年は目を伏せて、即座に強姦される形に縛られて地面に転がされている、コロッサスが「ぶよぶよした肉塊」と評した女の裸身を眺めた。少年の無毛の股間から垂れている小ぶりな淫茎にも、欲情の兆しはなかった。

　しかし。

「それじゃ、僕がなんとかしてあげなくちゃね」

　意味不明なことをつぶやいて。メルのかたわらに膝を突いた。淫毛を無で上げ、有るか無いかの淫核をつまむ。

「み゛ゃんっ……？！」

　その一点を雷に貫かれたような……甘い衝撃だった。メルも女であってみれば、若い頃から自慰めいた悪戯はしている。けれど。どうせ誰にも相手にされないどころか正体が露見すれば石もて追われる身と思えば、たとえ独り遊びといえども、性の快楽を追及するどころではなかった。簡潔に言えば、ホモ・メタモルフォセスナなら繭化していてもおかし

くない三十二齢にもなって、未だ性には目覚めていないのだった。

くすっと少年が笑った。

「感度がいいね。手間が掛からなくていいや」

つまんだ淫核をこねくり、包皮を剥いて実核を親指の腹でこする。

「み゛ゃああっ……もぼおおっ……！」

メルの腰が、びくんびくんと跳ねる。淫裂から粘っこい蜜があふれる。

「体格はまるで正反対だけど、ここは一緒だね」

メルはホモ・サピエンスの女性そのままの丸っこい体型をしている。博物館には、古地球年で五歳おきに百歳までの線刻画が展示されているのが普通だが、それにあてはめれば三十歳と近似しているだろうか。曲線で構成された体型は、ホモ・メタモルフォセスと比べれば脂肪が多めに乗っているが、それでも、もしもちゃんと副乳を備えていたら、彼女の裸身で勃起させない男のほうが少数派になっていただろう。

一方の少年は、ホモ・サピエンスと比較すれば、総合的な体格は地球年で十五歳の少女あたりか。完全な相似形というには、やや細身だった。ホモ・メタモルフォセスの雌形よりもさらにひとまわり小さな上乳と、もっとささやかな下乳を備えている。淫毛は無いが、これは男性器を際立たせるために剃らされているのだから、外見上の相違点とはいえない。

対照的なふたりではあったが、メルの淫核と少年の淫茎。それは、少年がいった通りに一緒。標準に比して小さいのだった。

少年はメルを弄っているうちに勃起させていた。勃起しても、男性の標準よりは小さい。しかし。少年は細い縄を団長から手渡されて、それを勃起の上に巻き付けていった。雁首の下を二重に巻いてから、左右に振り分けた縄をひと巻きごとに結び目を作りながら根元まで縛り、裏側にも結び目を連ねてさらに巻き上げる。裏筋のところで堅く結び留めると――コロッサスが勃起させればそうなるだろうというほどの太さになった。縄の毛羽と結び目とで、その『威力』は巨人を上回るだろう。

「これなら、大きなお姉ちゃんだって満足してくれるよね？」

「んんんっ……んん！」
　メルは必死にかぶりを振った。そんな『物』を挿入されたら裂けてしまう。
「大丈夫だよ。ちゃんと天国へ連れてってあげるから」
　少年はメルにおおいかぶさって、縄の装甲を纏った淫茎を無造作に挿入――しようとして、わずかに眉をひそめた。
「あまりほぐれていないね」
　それでも、強行突破しようと試みる。
「み゛い゛い゛い゛い゛っ……！」
　身体がまっぷたつに裂けるような激痛に、メルは悲鳴をあげた。やめてと訴えることもできない。しかし。
　少年は身を引いて身体を起こした。
「もしかして、交尾の経験は無いの？」
　メルは懇願の想いを込めて、何度もうなずいた。
「ねえ、団長。これは無理だよ」
　少年は凶器そのものの淫茎を指差した。
「抜き身だけのほうが、いいんじゃないかな」
　団長が即答する。
「誰よりも経験豊富なおまえがそう言うなら、そうだろう。だが、言い聞かせられんかったら、おまえも『北風』だぞ」
　少年は、団長とは逆に考え込んで――結局はうなずいた。
「時間を掛けるけど、それはかまわないでしょ」
「好きにしてみろ」
　少年は淫茎の縄をほどいて。しかし、すぐにはメルと交接しようとはしなかった。
「普通に媾合うと、最初は凄く痛いんだよね。僕だって泣き喚いたもの」
　少年を買う女は、すでに子育ての目途がつき夫の死期が迫った、いわば百戦錬磨の強兵

ばかりだった。少年は、処女どころか経験の浅い娘を相手にしたこともない。しかし少女としては当然に破瓜を体験しているし、未熟な女性器を過度に犯される苦痛も否応なく教え込まれてきた。だから、初めてのときにはどんなふうにされたいかは、他の男たち（当然に女性を経験している）と同様に、知悉していた。

男によっては、それを承知のうえで、「受け」から「攻め」へと変わったことを意識するあまり、不必要に嗜虐的に振る舞う者もいるのだが――少年には、その必要も無かったし、言い聞かせるのにしくじれば、自身も『北風』に曝されるのだから、本気でメルに優しく接して、交接の快感を教え込むつもりではいた。

サピエンス返りでも淫核は最大の弱点。むしろ小さいだけに感度も凝縮されていると判断して、少年はそこを重点的に攻める。一方で、掌に余る乳房も、これは大きいから感度も鈍いだろうと荒々しくこねくり、乳首もおさおさ怠りない。

「ばべ……み゛びい゛い゛い゛っ……ま゛あ゛あ゛あ゛っ……！」

メルは、生まれて初めての雷鳴轟く衝撃に、為すすべを知らず悶え哭く。

少年は女性器への愛撫を口唇に替えて、空いた手で男女共通の排泄穴も弄る。

「知ってる？　ここだってチンポを挿れられるんだよ。前と後ろと二本挿しにされると、きつくて痛いけど、天国を突き抜けるくらいに気持ちいいんだよ」

「しかも、女にてめえのチンポを嵌められたときは、アンドロとギュノスがまとめて昇天してやがったな」

空中ブランコの男が半畳を入れて、ふたりの娘に脛を蹴とばされた。女から男に変態するのだから、ことに人口が増えつつある状況下では、常に男性のほうが少ない。しかも、稀ではあるが第三次性徴の途中で死ぬ者もいるし、男性化後のＰＣの侵襲が極度に速い例も散見される。男ひとりに嫁八人とまではいかないにしても、その傾向にはある。つまり、この三人もそういう関係だった。

もちろんメルは、そんなことを穿っているどころではない。少年に追い込まれて、未知の登攀道を駆け足で登らされている。

少年は冷静に判断――したつもりだろうが、自身の女としての初体験は遠い昔。少年としては、熟れてじゅうぶんに開発された女しか知らない。

濡れているし善がってもいる。再び、少年はメルに覆いかぶさって。淫裂に怒張を埋めていく。

乳房が双つしか無いことも（あまり）気にならない。自分には余分な物が付いているのだから、むしろ差し引きゼロになる――と、意識はしていなくても。あるいは。成人に比べて小さな、自身の乳房と膣と淫茎。細身で小柄。一方のメルは、巨人がぶよぶよと評した身体も、大きさは成人男性に伍している。

何もかもが正反対。しかも、小さな自分が大きな女を支配している。少年の男の部分は欲情していた。精神的にも肉体的にも。

つまり、結果として。メルにとっては、じゅうぶんに痛みを伴なう破瓜となった。

「んむ゛……んんん、んんっ……」

しかし、悲鳴をあげるほどではない。痛みを堪えているうちに挿入されてしまったという――平均より二十齢近くも遅れての初体験は、破瓜そのものは、まったくあっさりとしたものだった。屈辱的な姿勢に縛られて、衆人環視の中で、本人の意思に反した強姦だったという点を除けば、だが。

しかし、破瓜がすんなりと終わったからといって、凌辱もすぐに終わるのではなかった。むしろ、挿入されてからが本番だった。

少年はゆっくりと抽挿する。腰をくねらせ、膣壁を隈なく探る。

体格に比例して、メルの器官は大きい。少年は小さい。膣内を擦られ抉られても、無言で耐えられるくらいの痛みしか感じなかった……のだが。

「ん゛っ……？！」

膣の割と浅い、下腹部の裏側あたりに、ぴりっと小さな刺激が奔った。それは、メルが知り初めた性感だったかもしれない。しかし。

「ここ？　やっぱり、このあたりなんだね」

再びメルから反応を引き出そうとして、少年はここと見当をつけたあたりを亀頭でつつく。しかし、同じ手応えは二度と返ってこなかった。

「刺激が弱いのかな？」

少年の動きが激しくなった。

メルの苦痛が跳ね上がる。

「み゛や゛あ゛あ……あ゛え゛え゛……」

頭を激しく振って拒み、叶わぬと悟って啜り泣く。痛みよりも、蹂躙されているという屈辱。それが怒りではなく悲しみを誘う。

嗜虐癖のある者には堪えられない光景だろうが、少年にその傾向は（おそらく、それほどには）無かった。

「ねえ……最初から善がれとは言わないけど。もうちょっと我慢しなよ。これからは、もっともっとでかいチンポも嵌められるんだから」

すでにメルが自分と同じ境遇に陥っているかのような物言いだった。いや、事実そうなのだろう。拒めば、『北風』という言い聞かせが待っている。

それを思い出して、メルはいっそう激しくかぶりを振った。

少年がメルの顔を見下ろして、小さく溜息を吐いた。

メルは痛みがわずかに和らいだのを感じたが――少年の動きが激しくなって、再びくぐもった悲鳴を漏らす。

少年は、萎えようとする股間を鼓舞して、メルを苦しめる。それでも、すこしでも快感を与えようとして、左手だけで上体を支え、右手で淫核をまさぐる。

「んんんっっ……」

メルの中で、激痛と快感とが争う。しかし、それは肉体だけのこと。彼女の心中では、屈辱と絶望とが渦巻いている。けれど、恐怖も憤怒も薄かった。ついに――恐れていた、けれど己には似つかわしい運命に追いつかれたのだという諦めが、渦の中心にあった。

それでも。みずから屈辱の運命を受け容れるほど落ちぶれたくはなかった。鎖につなが

れ檻に閉じ込められて見世物にされようと、このような形で誰かれなく犯されようと――この少年のように、運命に媚びたりはしない。偏端者ではあっても、神話の怪物でもなければ恥知らずの淫売でもない。屈してなるものか。

そのような態度が、いっそうの屈辱と苦痛とを招くだろうと分からないほど、メルは愚かではなかった。しかし、殺されてでも守り抜かねばならない尊厳というものはあるのだ――とは、性に根差した残虐の執拗を知らない者の虚しい決意にしか過ぎない。それをメルは、まさに身を以って知ることとなる。

――みずからの惨めな強いられた破瓜の記憶を思い出すまでもなく、このような形での初体験で、今後の惨めな境遇をも甘受するほどの忘我へ追い込めるはずもないと、少年は知悉していた。少しでも快感を与えただけで上出来だった。もちろん、団長の評価は異なっていて、自身も『北風』は免れ得ないだろうけれど。

少年はメルのくぐもった悲鳴も団長の思惑も無視して、激しく腰を遣って、萎えそうな淫茎を射精にまで導いた。やれるだけのことはしたと、団長を納得させる（しないだろう）ために。しばらくの間をメルの上に突っ伏していたのは、射精後の虚脱なのか、わずかでも休息を与えてやろうという優しさなのか。

「大見得を切ったくせして、だらしないガキだな」

団長が少年の脇腹を蹴った。少年は実のところ、ガキと呼ばれるほど若くはない。惑星エデンの一公転を一年と数える暦法で二十齢を超えている。第二次性徴の発現が男性と女性とで拮抗した反動で肉体の成長が抑制された結果、五齢ほども若い外見にとどまっているのだ。

少年を蹴り転がしておいて。男たちが、メルの拘束を解きにかかった。しかしそれは、彼女を赦してやるためではない。『北風』の支度だった。

どんなふうにするのか見せてやろう。団長はうそぶいて。コロッサスにメルを羽交い絞めにさせておく。

少年も立たされて。両手を縛られ、天幕を支える柱から柱へ渡されている水平の梁から

吊り下げられた。頑丈な台に支えられた細長い角柱が据えられて、その上に少年は下ろされていく。少年は腰をくねらせて、みずから膣穴に角柱を受け挿れた。両脚を開いて台を踏む。足首を台に縛り付けられて、少年はΛの字形に拘束された。

「つぎは、おまえの番だ」

「むうううううっ……！」

口をふさがれたままなので、抗議や拒否の声は封じられている。ただ、かぶりを振って身をもがくことでしか意思を表わせない。そして、彼女の意思を尊重しようという者は、この場にはいない。

メルは少年と同じように吊るされて、真下に角柱の台が据えられた。角柱の端は細く丸められている。そこへ潤滑のための油が塗られた。

「おまえは、こっちの穴が良かろうな」

吊り下ろされるメルの身体が後ろからわずかに押されて、角柱は肛門に突き刺さる。

「み゛い゛い゛い゛っ……！」

こちらも、当然に異物を受け挿れたことなどない。みちみちと穴を拡げられていく鈍いけれど熱い痛みと、排泄器官を辱められる恥辱と。しかし、体を動かせば角柱がいっそう残酷に穴を抉るので、悶えることすら出来ない。

足首をつかまれて開脚させられ、台に縛り付けられる。

興行が終わったらしく、団員たちも続々と楽屋へ戻ってきた。団長が数人の女を呼びつける。

「このグライアは、儂とコロッサスで言い聞かせてやろう」

団長は、すでにメルの芸名（？）さえ決めていた。それが古地球のギリシャ神話に登場する、ひとつの目を三人で共有する老婆の名前だなどと、メルが知る由もなかった。

「アンドロのほうは――そうだな、カーマとラーマが鞭、アンディとミンディが拳骨だ。シェルビーは手を出すなよ」

名指しされた女たちが少年を取り囲む。猛獣使いの鞭を持っているのが、カーマとラー

マ。アンディとミンディは空中ブランコの立役者だ。
「ねえ、団長様。この人たちじゃ物足りないよ。コロッサスと一緒に、僕のほうを可愛がってよ」
　アンドロと呼ばれた少年が甘えた声を出した。
　ひゅん、ぱし、バシイン！
「きゃああああっ……！」
　カーマとラーマが左右に分かれて斜め後ろから長い鞭を振るうと、鞭は太腿を巻いて先端が股間を打ち据えた。一本はまだ半勃ちの淫茎を、もう一本は睾丸を直撃。
　少年の膝が折れ曲がって、角柱がいっそう深く女性器に突き刺さった。
「あたいたちだって、二人掛かりならコロッサスくらいはおまえを痛めつけてやれるんだよ」
　アンディとミンディがアンドロの正面に並んで立って、拳にはあっと息を吹き掛けて。二人同時に腹に突き入れた。
　ぼすっ！
「うぐ……」
　直前に腹筋を固めて、少年は打撃を受け流した。
　どんっ！
「げふっ……！」
　少年が息を吐いた瞬間を狙って、二人の女が左右から脇腹を殴った。さすがに、これは効いたようだった。
　四人とも、アンドロよりも頭半分くらいは背が高く、ほっそりした見掛けに似合わず肉体も鍛えている。それでも物足りないなどと言ったアンドロは、よほど悦虐に染まっているのか、初めて『北風』の洗礼を受けるメルを庇ってのことなのか。
　そのメルは、アンドロを囲んだ四人よりは背丈も身幅も大きい。体重は団長の七割くらいだろうが、背丈はほぼ同じ。もちろんコロッサスと比べれば、アンドロと女たちとの比

ではないが。
「改めて尋ねるが、曲技団に加わらねえか。食い物と寝床だけは、じゅうぶんにあてがってやるぞ？」
　芸が無く、サピエンス返りの肉体を有するメルが、曲技団の花形になれるはずもなく、アンドロと同じような見世物にされるのは自明の理だ。
　メルは、ありったけの勇気を振り絞って、団長を睨みつけた。
　団長は、手にしていた鞭の柄をメルの股間に突き立てて抉ることで、野生の牝獣の反抗に応えた。
「それ、おれの鞭だよ。汚さないでくれよ」
　カーマが文句を言った。本気で嫌悪している声音だった。
　つまり。曲技団の一座に加わったところで、それがメルに与えられる処遇だった。
　団長は鞭の柄を引き抜いて、汚れをメルの（双つしかない、大きな）乳房になすりつけた。いや、乳房に突き立ててこねくった。
　メルに許される反抗は、呻き声も漏らさず苦痛を隠して、相手の顔を睨みつけることだけだった。
「ふふん。調教のし甲斐があるな」
　ぶゅん、ぱしいん。鞭を宙で大きく鳴らしてから、団長はメルの背後に立った。それまで団長が立っていた位置にはコロッサス。両手の指をぼきぼき鳴らして、メルを威圧する。
「よし、軽くいってみるか」
　ぶうん……バシイン！
　言葉とは裏腹に凄まじい風切り音とともに、鞭が尻に叩き付けられた。
「み゛ゃあ゛あ゛あ゛っっ……！」
　灼熱が弾けたような激痛に身をよじって、その動きで角柱に肛門を抉られる。意識が下半身に向いたところへ。
　ぼすん！

「も゛ぼ゛お゛っ……！」

柔らかな腹を拳で打ち抜かれて――身を二つに折ることもかなわず、手首を頭上に吊り上げる縄と肛門を貫く角柱との間で、激しく身体をくねらせるメル。

「うぶ……がっ……！」

嘔吐して、吐瀉物を吐き出せず、咳き込むことすら叶わず、窒息に悶える。

さすがに団長が、口を縛っている襤褸布を緩めて、詰め物を口から引き出してやった。

ぼたぼたっと、メルは口から胃液をこぼして、激しく咳き込んだ。

メルがいくらかは落ち着くのを待って、団長は髪をつかんでメルの顔を仰向けた。

「これが最後の慈悲だぞ。まだ厭だなどとぬかすなら、気付け薬が効かなくなるまで痛めつけてやる」

殺さない程度に手加減はしてやると付け加えることで、いっそうメルを震え上がらせる。

メルはためらった。今の鞭と拳骨。これを何回も繰り返されて、気絶して。それでも拒絶を続ければ……同じ仕打ちか、さらに酷いことを繰り返されるだろう。

『健康な生と安らかな死』、『屈辱と安逸』、『苦痛と快楽』

その言葉を聞いたのは、遠い昔のように思える。

言葉の通りに、同朋ともいうべき生き物たちが、どのように扱われているのかを、たしかにこの目で見届けた。

ならば。これは『運命』ではないのか。

メルは、力なくうなずいていた。

「ふん。聞き分けが良くなったな」

メルは赦されて拘束から解放されたのだが。

「おまえには、こいつの分もくれてやろう」

少年には存分に『北風』を吹かすつもりらしい。それとも『太陽』なのか。

「お願いです。僕にも猿轡を噛ませてよ。途中で泣き言なんか言えないように」

少年が被虐を望んでいるとは、メルにも明らかだった。

「駄目だな。おまえの悲鳴を聞かないと、一日が終わった気がしない。おまえだって、歌うのが好きなんだろ」

　そして、女四人がかりの『北風』が始まったのだが。鞭が二人で十発ずつと、拳骨も十発ずつ。その間、少年は小さく呻くだけで、悲鳴はあげなかったし、赦しを乞ったりもしなかったのだった。

何かが道をやってくる

昼間は檻に入れられて見世物にされている亜人たちも、夜は幾分かでも人がましい扱いを受けている。居住用の小天幕を与えられ、他の団員たちから隔離されて、そこで食事をして雑魚寝する。最低限の衣類も許される。

もっとも、『アラクネ』――背面癒着双生児のリーとリルは、胸から腰まで布を巻き付けただけで、最低限の水準には達していないけれど。ちなみに、蜘蛛の形に擬すのは檻の中だけで、ふだんは背中合わせで立つか座るか。眠るときは横向きになる。

しかしメルには、それっぽっちの安息も与えられず、特別扱いをされた。まだ本心から服従していないと見透かされて。全裸のまま後ろ手に枷を嵌められ、片足を鎖につながれたのだった。横座りすると、背中で拘束されている手首が枷の重みに引っ張られて、不安定になる。いきおい、両足を投げ出して、上体を俯ける姿勢になってしまう。

わずかでも拘束を緩めてもらえるのは排泄のときだけ。足の鎖からは解放されて、その代わり首に鎖を巻かれ、世話係を命じられたアンドロに引かれて外へ出る。

敷地の隅には、六つの簡易便所が仮設されている。そのうちの三つには『お客様』、二つには『共用』の木札がかけてある。すこし距離を置いた端の便所は『亜人専用』。アラクネ姉妹が同時に使えるよう、便座が異様に長い。そして、出入口に扉が無い。

その便所さえも、メルは使わせてもらえなかった。都度にアンドロが穴を掘って、そこへ大小をさせられる――今夜のところは小だけだったが。後始末までは、アンドロも面倒をみてくれない。そして手は使えない。つまりメルは亜人以下、まるきりの獣として扱われた。

天幕の中で寝ることを許されただけでも厚遇――なのではない。人がましい暮らしを見

せつけて、心の底からの隷従を引き出そうという、団長の目論見だった。

それはたしかに――アラクネ姉妹、乳房が八つあるキム、真性のホモ・メタモルフォセスではあるが、蛇と同衾するが故に亜人として扱われているリザ、そして幼形半陰陽のアンドロとが、和気あいあいと寛ぐ様子を見せつけられると、そこに加わりたいと思ったりもする。

しかし、可能だろうか。アンドロは世話係ということになっているから、多少は違うのだが。アラクネもケルベロスもメデューサも、ことさらにメルを無視している。それが団長に言い含められてのものなら、まだしも。無視ではなく嫌悪ないし憎悪の感情が見え隠れしている。

それはメルがサピエンス返り――醜い異形への嫌悪というだけでなく、伝説の太陽系統合宇宙軍による虐殺の集団潜在記憶に根差している憎悪とすれば、ここにすら、彼女の居場所は無い。

差別された者たちからのさらなる差別と疎外。それは鞭や拳骨よりも残酷に、メルを打ちのめした。で、あってみれば。千切った麺麭を口元に突き付けられて、頑なに顔を背けて新たな反感を買うのは、得策ではない。

メルは素直に口を開けて給餌を受け容れた。麺麭は粗悪ではあったが、古びて硬くなっていたり、まして汚れていたりはしなかった。匙に掬われた羹汁は美味だった。

飢えや渇きに意識を向けられる状況ではなかったが、それでも。わずかでも腹が満たされると、あたかもそれが土台になったかのように、心が幾らかは落ち着いてくる。アンドロの行為から義務や施しの影が薄れて、まさか慈愛までは見えてこないが。この少年は、三十二齢にもなったメルをついに『女』にした『男』ではあった。

このようにして。メルの運命を決定付けた激変の一日は、比較的穏やかに終わったのだった。敷布一枚を隔てた地面の凹凸にじんわりと肌を痛めつけられ、天幕の内とはいえ冷え込む夜気に裸身を曝されながらも。

――メルが生まれ故郷のデフォルマンタを旅立った、正確には出奔したのは、二十九の

齢だった。三十も近くなって閉経が訪れず、まともに繭化できる望みが日毎に薄れていたときだった。

エデンでは、遺伝子に関わる一切が禁忌視されているから、メルがサピエンス返りした原因は解明されていない。解明するまでもなく抹殺すべき存在であることは、すでに述べた。

デフォルマンタに留まれば、正体を知られていても、殺されることはなかっただろう。存在を無視され、不可触賤民として扱われるとしても。

それを潔しとせず、意味はいささか異なるものの、ホモ・メタモルフォセスであれば必然の『第二の人生』を、メルは求めたのだった。もちろん伴侶を得られるはずもなく、正体が露見すれば迫害されおそらく殺害される危険を冒して。

そして三年を経て、運命はメルに追いついたのだった。あるいは、断ち切られたのかもしれない。

平日の興行は夕方からの一回とはいえ、前日の清掃から今日の仕込みまで、裏方の仕事は早朝から始まる。表舞台に立つ者たちも、稽古はもちろん、衣裳の手直し、あるいは命を託す道具の手入れなど、することは多い。

そういった繁忙の圏外に逃れていられるのは、亜人たちだけだ。誰が、馬や虎に仕事を手伝わせるだろうか。

そして亜人たちには、売上げに直結する重要な役割が振り当てられている。昨日メルが誘い込まれてしまったように、檻の中で、そこに掛けられている名札に似つかわしい、そして淫らな『性態』を晒して、野次馬を引き寄せるという。

メルに与えられた『グライア』の名は、ホモ・メタモルフォセスとしてはあり得ないほど高齢の女というだけで、実際のところは名前と無関係に外見だけで、彼女がサピエンス返りだと一目瞭然だった。そう明示しないのは、衆愚の偽善的良識への配慮であり、団長の衒学趣味でもあった。

とにかく、メルは――双つしかない、醜く巨大な乳房を隠さず、常人より五割は長い淫裂と分厚い大淫唇も晒すことを命じられた。

「いずれは手慰みもアンドロとの媾合いもさせてやるが、しばらくの間は、御開帳だけで許してやる」

軽く言われても、羞恥の根源を衆目に晒すなど、簡単に出来ることではない。まして、絶対に見られないように意識して心がけてきたメルにしてみれば、断崖絶壁から身を投げるほうが容易にも思えるのだった。

一日が十八時間のエデンでは、九時が正午にあたる。だから十二時、あと六時間で一日が終わる頃合いともなると――仕事を早く切り上げた者や、朝と夕方の家事の合間を盗んで外出してきた者たちで、街外れに派手派手しく張られている曲技団の天幕周辺も賑わってくる。

見世物の檻がひとつ増えていると気づいて、『グライア』とはどのような偏端者だろうかと、野次馬が群がる。

メルも、まったく覚悟が出来ていないわけではない。見世物にされて、それで安逸な生が保証されるのなら、恥辱など我慢しなければならない。そう、自分に言い聞かせている。実のところは――野次馬を（ではなく、団長を）満足させられなければ、昨夜は一発だけで赦された『北風』が彼女の肉体に吹きつけてくるだろうとは容易に想像できる。

だから。メルは横座りのまま、両手は下ろしている。それだけで、野次馬は驚愕し憎悪し侮蔑する。

「乳がふたつしかないぜ」

「忌まわしいサピエンス返りか」

「でけえなあ！」

「なんて、ぶよぶよした身体でしょう。観ているだけで吐き気を催しますわ」

「こいつの産みの親は気が狂ってたんじゃないか。なんで、生かしておいたんだ」

「そりゃあ、殺しちったら人の味を覚えたＰＣが拡散するからさ」

「そんなのは迷信だ」
　メルはいたたまれなくなって、両手で耳をふさいだ。
　離れたところから様子をうかがっていた団長が鞭を片手に背後から檻に近づく。昨夜の鞭とは違って、長い柄の先に短い革紐が垂れていた。鉄格子の隙間から差し込みやすくなっている。
「きちんと立って、股座も皆さんにお見せしろ」
　メルの反応を待たず、ピシリと背中を鞭打った。
　昨夜の一撃に比べればそよ風のような鞭だった。しかし、その先には『北風』が待っている。メルは両手を下ろして、ゆっくりと立ち上がった。
「それじゃ分からんだろうが。脚を開け」
　込み上げてくる涙と恥辱を堪えながら、ゆっくりとメルが脚を開く。
　ふたたび、野次馬がどよめく。
「乳と同じで、でかいマンコだな」
「そのくせ、赤ちゃんよりも小さな淫核ですわねえ」
「おおおい。よく見えねえぞ。かぱっと開いて見せろや」
　ぴしっ……鞭がメルの右手を打った。
「両手でマンコを開いて御覧にいれろ」
　メルは、さすがに躊躇した。
　団長は重ねて命令したりはしなかった。隣の檻を開けてアンドロを引き出し、メルの檻へ入れた。
「おまえの女だ。おまえから引導を渡してやれ」
　人垣の向こうまで届く大声。ざわめきと嘲笑が湧いた。
「見掛けによらず、このグライアは生娘……娘じゃねえか。ま、そういう次第で、アンドロの貧弱なチンポで道をつけてやったばかりでしてね」
　いずれは、この二匹の絡みもお目に掛けるかもしれません。もちろん、別料金をいただ

きますよ――と、後々の商売の種も撒いておく。

メルの檻に入れられて。こっちは、野次馬に聞こえないように小声で。

「覚悟を決めちゃいなよ。こういう身体に生まれちゃったんだからさ。それでおまんまを食えるんだったら、ありがたいことじゃないのさ。僕はともかく、きみはここを追い出されたら、あいつらに殺されかねないんだよ」

アンドロの言葉は、素直に受け容れられた。励まされているようにさえ感じられた。

メルはいっそう脚を開いて腰を突き出し、両手を添えて大淫唇を左右にくつろげた。

どっと、野次馬が嗤った。

「なんて恥知らずな」

「サピエンスなんて旧人類。猿と変わりはないのさ」

その旧人類が宇宙を渡ってこの惑星に植民し、ＰＣの脅威から逃れるために、やむなくホモ・メタモルフォセスを創り出したという『歴史』は、学校教育では教えられているものの、古地球から伝承された神話と同じようなものと思っている者も少なくはない。古地球を認めるなら、ホモ・サピエンスも神話ではないと矛盾に気づきそうなものだが――そこまで思索を深める『知識人』は、圧倒的少数派だった。惑星全体がひとつの国家に統合されているというよりも、三つある大陸のひとつにだけ、ごく少数の百万都市と、あとはせいぜい数十万人規模の『集落』が点在しているという過酷な環境下では、初歩的な電気文明を維持するだけで手一杯だった。というのは、言い訳に過ぎないのかもしれない。六千年以上の昔に、古地球のギリシャでは、宇宙の根源までが思索されていたのだから。つまりは、ホモ・メタモルフォセスという種が持つ性向、それとも古地球の二十世紀末からこっちの『人類』全体の傾向なのかもしれない。

余談が過ぎた。

嘲笑されながらメルは、感情なんか持たない見世物の珍獣になろうと努めていた。

「最初にしては、良い感じだよ」

股間を撫でられ、立てた指で淫裂を抉られて、感情が決壊した。

「いやっっ……！」

　アンドロの手を払いのけ、股間をかばった。

　アンドロは、きょとんとしている。

「厭なの？　いい子いい子してあげたのに？」

「……？！」

　アンドロが本気で言っていると分かって。メルは同情と悲哀を同時に感じた。昨日の団長のアンドロへの扱いからも分かる。彼娚への罰は性器に苦痛を与えることであり、褒美は快感なのだろう。自分も、きっと同じように扱われる。けれど、まともに育てられてきた自分は、アンドロのようには振る舞えない。その行き着く先が『北風』だとしても。

「いつまで、いちゃついておる。おまえの馬鹿でかくて醜いマンコを、皆様に嗤っていただけ」

　団長がわざわざ檻をまわりこんで横合いから、醜悪で巨大な乳房を鞭打った。

　メルは感情も思考も消して『御開帳』の姿勢に戻った。

　――じきに公演が始まって、檻のまわりの野次馬もぐっと数が減った。しかし皆無ではない。ことに、新規展示のメルの檻には十人ばかりが群がっている。

「団長が居ないからって、サボッてちゃ駄目だよ。折檻されるよ。昨夜のあれなんか、すごく優しいほうだったんだからね」

　自分の檻に戻っているアンドロから忠告されると、メルは野次馬に向かって『御開帳』をして見せるのだが。目の前に恐怖の対象が存在しなければ、どうしても羞恥が甦ってくる。ちょこちょこっと『御開帳』しては、檻の中央で横座りして、せめて乳房を晒すくらいでお茶を濁してしまうのだった。

　公演が終わって、客が続々――と、いうほどでもない。三々五々と、大天幕から出てきた。

　この地での興行は一週間を超えている。街の人口およそ一万人のうち三割以上はすでに観ている勘定になる。長期興行を打てば、いずれは三割が七割くらいにはなるのだが、率

が悪い。曲技団としては、連日が大入満員で、それから速やかに閑古鳥が鳴いてくれれば――さっさと切り上げて、次の街で興行が打てる。

メルへの『北風』が見世物にされたのは、そういった団長の思惑もあったのだろう。

「ずいぶんと怠けていたようだな」

たっぷりと躾けてやると脅しておいてから、声を柔かくした。

「が、それは明日のことにしてやる。今夜は三日分くらい甘やかしてやる」

亜人専用の小天幕へ戻されて。その夜は足首を鎖につながれただけで、手枷は無かった。寝るときにくるまる布も与えられて、早速にそれで身体を包んでも、誰にも咎められなかった。食餌も他の亜人と分け隔てはなく、匙と叉も与えられた。そして、大桶に張った水で身体を洗う贅沢まで許された。

安宿に比べても劣悪な処遇だったが、馬や虎よりはずっと人がましく扱われたと言えるだろう。しかしそれは、笞と人参にたとえるなら、人参の先払いではあったのだ。

翌日は土曜日。古地球の暦そのままに月曜から日曜まであるうちの週末すなわち休日だった。興行は八時から十二時と十三時から十七時の二回。亜人は七時までにはそれぞれの檻へ入った。入れられたのではなく、役割を自覚して営業を始めたのだ。

メルだけは『北風』の準備をさせられた。他の檻からすこし離れた場所にΠの字形の木組が作られて、そこへX字形に拘束されたのだった。柱の左右に台が置かれて、そこに『北風』を吹かす道具が並べられた。

向かって右側の台上には――短く扱いやすい鞭、先端を丸めて過度に肌を傷つけないよう配慮された笞、拳の威力を抑えるための詰物をした拳闘用の手袋。

左側には――木を削って作られた大小さまざまな模造淫茎、刷毛、紐や縄。

メルを囲んで半径三メートルほどのところに縄が張り巡らされて、一か所だけに出入口が設けられた。その手前に机が置かれて料金箱が載せられらて。横に即席の看板が立てられた。

嬲り放題

おひとり様十分間　ドッツ五十

道具持込可、但し事前に拝見します

以下の負傷には罰金を申し受けます

擦り傷を超える出血　　五ギル

骨折　一か所につき　五十ギル

目玉の損傷　　五百ギル

つまりは、客にメルを嬲らせて、それで小銭も稼ごうという目論見だった。祭などの催しには、皿を投げて割らせたり、大槌で梃子を叩いて反対側の錘をどこまで高く打ち上げられるかを競わせる商売も出る。それを生き物でやらせようというわけだ。犬や馬を使っては可哀想だが、サピエンス返りの偏端者ならかまわない。

ぼつぼつと集まってきた野次馬がメルを囲む。机の後ろに座っている道化師にあれこれ尋ねる者もいる。小柄な男が筒袴の革帯を引き抜きかけて、首を横に振られた。曲技団で使っている鞭は、音が派手で痛みも猛獣を服従させる程度には強いが、肌を傷つけない工夫が施されている。逆にいえば、十発や二十発ではたいした『北風』にはならない。

何人かが受付のまわりにたむろしていたが、人数が増えれば見栄も手伝って気が大きくなるのだろう。五人の男が縄張の中へ入ってきた。いずれも四十前後の年恰好。わずか十年しか続かない、男の盛りの真っただ中にある連中だった。

間近にメルの裸身を見分して。乳房をつかんでくる者もいた。

どういうふうに振る舞えとは、とくに指示されていない。メルはできるだけ無表情と無反応を装った。こういう場合は、それが嗜虐を煽るとも知らずに。

「生意気そうな目つきだな。こういう女を泣かせるってのは面白いかな」

「女かよ。まあ、牝には違いないけどよ」

「しかし、でかいな。華奢な娘っこを虐めるのはかわいそうだが、こいつなら……」

「だから、おれらの女と比べるのをやめろって。こいつは生きてるのが不思議なサピエン

ス返りの偏端者なんだから」

　サピエンス返り。偏端者。正体が露見すると、決まって浴びせられてきた罵声だった。しかし、罵る相手の顔を直視するのは、これが初めてだった。これまでは、迫害が身体に及ぶ前に逃げ出していたのだから。これからは必ず、罵声に暴力が伴なうのだ。

「十分だけなんだぜ。さっさと遊ぼうや」

「そうれもそうか。道化が言ってたな。後ろから鞭で前は拳か」

「女が四人がかりだっけ。けど、こっちは五人だぜ」

　勝手なことを言いながら、それぞれに得物を選ぶ。鞭が二人と笞が一人。残る二人は手袋だった。それぞれが斜めに位置を取って。笞を選んだ男は正面に立って、後ろへ引いている。

「へいへい。皆さんがお待ちかねだよ」

　道化師が煽る。事実、縄張を三十人以上が囲んでいる。女も混じっていた。

「おいらが音頭を取ってやるよ。それに合わせて十字砲火だぜ。せーえのお！」

　ぶん、パシン。

　パチイン。

　ぼすん、ばちっ。

　団長の鞭とコロッサスの拳に比べたら、そよ風のようなものだったが。

「効いてないぜ。手加減無用だ。思い切り懲らしめてやれよ」

　ぶうん、バシイン！

　どすん！

「まだまだ。けろっとしてるじゃないか」

　ぶゅうん、バッヂイン！

　どがっ！

「うぶっ……」

　鞭よりは拳がこたえた。しかし、男たちの動きを見定めて腹筋を固めているので、じゅ

うぶんに耐えられそうだった――のだが。

　二本の鞭が引かれた瞬間に、引き下がっていた男が踏み込んできた。下手に提げていた笞を股間に打ち込んだ。

　ばしゅん……！

「きゃああっ……！」

　どこを打たれるか見えていたけれど、予期していたよりもずっと鋭い、刃物で切り裂かれたような激痛だった。

「へえ、そっちのほうが効きそうだな」

　ひとりが右の手袋を外して、まだ残っていた笞を手にした。

「正面は俺にまかせちゃくれねえか。長鞭捌きにゃ自信がある。でかいケツが的じゃ腕が泣くってもんだ」

　鞭を持った男が真正面と真後ろ。笞の二人が左右に分かれた。残ったひとりは、割り込む場所が見つからないので身を引いて。もう一方の台に並べられている淫具の吟味にかかった。

「さて、三分だけ延長しますよ。見物の皆さんに謎掛けだ。前に立ってる三人は、どこを狙うと思いますかな。見事当てたお人は三人まで無料にするよ。早い者勝ちだ」

　机に紙を広げて鉛筆を添える。

　書くだけなら無料と、女子供まで群がる。子供はともかく、女は恥ずかしげもなく具体的な名称を書き込む――というのは、性別が生涯固定されているホモ・サピエンスの見方である。ホモ・メタモルフォセスは、女から男まで精神が地続きなのだ。言葉遣いだけは意識して性に合わせているけれど。

「よおし、締め切ったぞ。お待たせして済みませんね。詫びはグライアに入れさせます。一発なんてケチくさいことは言わず、三連発くらいは叩き込んでやってください」

　四人が鞭と笞を構える。その時点で、狙いは分かってしまう。

「やっぱり、そうだろうねえ」

「みんなが正解なんじゃありませんの？」

道化師の合図で、四本の鞭と笞がメルの裸身に叩きつけられた。

バシイン！　ピチッ！　ビシイッ！　パンッ！

「いぎゃあああああっっ……！」

メルは身をのけぞらせて絶叫した。乳首に笞の先が食い込んだくらいは耐えられなくもない。けれど、股間を下から上へ掠めた長鞭は空振りのように見えて、確実に淫核を打ち据えていた。股間を真っ二つに切り裂かれたような激痛が背筋を尽き抜けた。

「いやあああっっ……！」

痛みを抱え込む暇もなく二発目を打ち込まれてさらに悲鳴を搾り出される。

「あああああ……」

三発目では、叫ぶ気力さえ剥ぎ取られていた。

「はいはい、まだ時間はあるよ。気絶するまで手を緩めないでおくれよ」

督促されて、四人はさらにメルを打ち据える。

「おい。痛めつけるだけじゃかわいそうだ。ちっとは慰めてやろうぜ」

手持無沙汰だった男が四人の手を止めさせた。両手に模造淫茎を持っている。

「なんてでかさだよ。俺の倍はあるぜ」

倍は誇張だとしても、直径六センチは過激だった。もっとも、二つのうちの小さいほうは四センチくらいだが。

ちなみに。穴が二つあるなら突っ込むのも二か所――という発想は一般的ではない。道化師に吹き込まれたのかもしれない。

男はメルの背後へまわると、淫具を潤滑することもなく、力まかせに小さい方を突き挿れようとした。

「痛い……せめて、濡らしてください」

一昨日に貫かれた角柱よりは、ましに思えた。けれど、あれは先端が細くなっていた。

「そんなの、準備されてないぜ。どうしてもって言うんなら、ほれ……」

模造淫茎をメルの口元に突き付ける。

メルにはすでに羞恥などという優雅な感情を嗜む裕りは無い。素直に口を開けて模造淫茎を咥えた。懸命に唾を搾り出して、舌でまぶす。

あらためて挿入が試みられた。肛門全体が身体の中にめり込んでくるような痛覚。

「ぐううう……」

呻いても、圧迫は弱くならない。どころか、こねくられて。

ずぶうっと、一気に突き抜ける感覚が生じた。鈍い痛みが爆発して。

「ひいいっ……！」

ずぶずぶと、一気に押し込まれた。

「はあ、はあ……」

喘ぐ口に、いっそう太い模造淫茎が突き付けられたのだが。

「おおい、時間切れだよ。それをぶち込むだけは、待ってあげますけどね」

道化師に急かされて男は、潤滑されていない模造淫茎をメルの淫裂に押し挿れた。適当にこねくって、不確かな手応えで穴の位置に見当をつけて。ぐうっと押し込むのだが、挿入っていかない。面倒だとばかりに膝をあてがって、押し込むのではなく蹴り上げた。

「ひぎゃあああああっっっ……！」

びききっと肉の裂ける音が身体に響くのを、メルは感じた。アンドロの貧弱な男性器に貫かれたときとは比べ物にならない激痛が腰で爆発して。そこに留まった。

「はあい、そこまで。お次と交代だよ」

五人の男たちが責め具を台に戻して、縄張から出て行く。二本の模造淫茎はメルの股間に残されたままだったが――次の五人がメルを取り囲む前に、まず太いほうが抜け落ちた。

「なんてえガバマンだよ。身体がでかいとマンコもでかいんだねえ」

すかさず道化師がからかって嘲笑を誘うが。実際のところは、膣の収縮が強くて押し出されたのだろう。

「……」

メルは力なくうなだれている。膝の力は脱けて、磔けられているのではなく両腕で吊るされている。

「まあ、血まみれですわね」

裕福な身なりの女が、地面に転がった模造淫茎を足で蹴って顔をしかめた。

「まさか処女だったわけでもあるまいな？」

連れ合いの男が道化師を振り返った。

「処女じゃあないですけどね。開通したのが、なんと一昨日。しかも、アンドロギュノスの細チンポだったから――六センチは、ちょっと無理でしたかね」

どう見ても、メルは三十齢を越えている。その齢まで経験が無かったとは、これも嘲笑の対象にしかならない。受胎可能期間が十年そこそこのホモ・メタモルフォセスにとって、処女とは初潮から一年以内に捨てるべきものだった。

「かわいそうにね。あんな気持ち良いことを知らずにいたなんて」

二人の子供らしい十代半ばくらいの娘が、まったく同情していない声でからかった。

「そんなことを言ってはいけない。こんな醜い偏端者を抱く男なんていないよ」

「でも、お道具を使うことも出来たでしょうに」

「だから、こうやって使ってやるのだよ」

父親が、転がっている模造淫茎を足で転がして、血と泥にまみれさせて。指でつまんで拾って、手巾で根元を巻いてから握り直した。そして、無造作にメルの股間に抉り入れた。

「ひいいいっ……」

再びメルが悲鳴をあげた。それまでよりはか細い、息絶えるような、あるいは幾らかは馴染んできたかのような――男の股間を刺激する声だった。

もっとも。メルもただ激痛に喘いだだけではなかった。模造淫茎にまぶされた土の粒が、快感ではないにしても苦痛とも微妙に異なった感覚を引き出していたのだった。

「これで固定してやったらどうかな」

責め具を物色していた男のひとりが、細い紐を持ってきた。

「良い考えですな。お願いしましょう」
　二本の模造淫茎が紐でつながれ、紐の端は強く引き上げられて腰に巻き留められた。
「このでかい乳も垂れないようにしてやろうか」
　今回は五人ではなく六人だった。親子連れの三人と、友人同士らしい男が二人。あとの一人は、五十も半ばを過ぎている。ＰＣ汚染が進行して、日々身体の具合が悪くなってくる年代だ。
　メルの乳房に太い縄が左右別々に巻き付けられ、ぎちぎちに締め上げられた。根元がくびられて、乳房が大きな毬のようになった。並みの女なら、こうはならなくて縄がすっぽ抜けていただろう。飛び出した乳首も紐でくびられる。
「どうせなら、こっちもだな」
　小さな淫核も包皮を剥かれて紐でくびり出された。三本の紐がひとつに結ばれて、転がっていた枝を絡めてねじられ、三つの突起が身体の中心へと引き伸ばされた。
　そして親子連れが刷毛でメルの全身をくすぐり始める。父親もかつては女だったのだから、責める場所は心得ている。
　くすぐったい感覚は、じきに性感へと昇華していく。
「あっ……いやああ……赦してください」
　紐にくびられ充血して痛みに疼いている突起をくすぐられると、快感と苦痛とが混じり合って……メルは身体をくねらさないではいられなくなる。
　そこで一斉に刷毛が引かれて。
　ぶううん、バシイン！
　尻と胸と股間に長鞭が飛んでくる。
「ぎゃはあああっっ……！」
　鞭に叩かれた模造淫茎が体内を抉る。三点を結ぶ紐も強く引っ張られて、千切れてしまいそうな鋭い痛みをメルに与える。
　それが繰り返されて、メルの悲鳴は弱々しくなっていく。さらに続けられたら、失神し

ていただろうけれど。開幕を告げる声が大天幕から聞こえてきた。
「おおっと。今からなら、まだ間に合うよ。天幕へ急いだ急いだ！」
野次馬の何人かでも駈け込んでくれれば、それだけ儲かる。道化師が野次馬を追い立てて――メルのまわりは閑散となった。
それでも。新規の『珍獣』を見ようという野次馬がぽつぽつと訪れる。裏方の男がひとり見張に残っていなかったら、縄張の中まで踏み込んできて、どうせ痛めつけられているのだから、痣のひとつやふたつ増えてもわからないだろう――などと手を出してくる不心得者もいただろう。
公演が終わって、檻のまわりにも再び人だかりが出来たが、朝ほど多くはなかった。二回目の開演までは一時間しかない。なんとなく慌しい雰囲気で、檻の前は素通りすることになる。
メルはX字磔にされてはいたが、何かをされるわけでもなく、手首に食い込んでくる縄の痛みも、鞭や拳に比べれば、無いに等しかった――というのは、すでに麻痺しているからではあったが。
二回目の公演が始まって一時間も経ったころ、アンドロだけが檻から出されて、楽屋天幕のほうへ連れて行かれた。
程なくして、一台の乗用自動車が、メルの磔けられている空き地へ乗り入れて来た。檻の並べられている道よりは、野原に接しているこちらのほうが自動車の通行には適しているのだが。貨物自動車ならともかく、乗用自動車が何の用事だろう。人が降りる気配もない。苦痛に呻吟しているメルも、幾らかは関心を向けた。
訝しんでいるうちに、天幕の陰から二つの人影が現われた。曲技団の男とアンドロだった。アンドロは、奇妙な格好をしていた。革袋のような物で男性器の部分をすっぽり包んで、そこに両手を添えている――のではなく。革袋の口が鎖で閉じられていて、そこに手錠がつながっているのだった。口には玉轡を噛まされている。
X字形に磔けられているメルがいっぱいに首をひねって様子を見守るうちに――二人が

自動車に近づく。アンドロに付き添っている男が後部の荷物室を開けて、アンドロはその中へ入って身を屈めた。男が蓋を閉じると、自動車は何事もなかったかのように走り去った。

亜人たちも檻の中から眺めていたはずだが、誰も今の出来事を気にしていないようだった。

まさか、アンドロがどこかへ売り飛ばされたとか、そういうことではないだろう。もっとも考えられるのは――仮小屋でアンドロに性的な遊戯の相手をさせる代わりに、自宅かどこかの宿へ連れ込む。そういうことなのだろう。アンドロの奇妙な姿から察するに、彼娚を買った男（とは限らない）は、団長と同じような嗜癖の持主に違いない。

そして。アンドロは、こういったことには慣れている。すくなくとも諦めているのだ。

堕ちた境遇に翻弄されている自分は、彼娚のことを心配するどころではない。メルは、今見た光景を忘れようと決めた。

二度の公演が終われば、客寄せの必要も無くなる。メルも拘束を解かれて小天幕へ戻された。性器の裂傷は――どうせ処女喪失のときはそうなるのだからと、手当などしてもらえなかった。その他の部位は、いっそう取るに足りない。

殴られたところは痛いけれど、縄や紐で括られた箇所はくっきりと痣になっているけれど。股間を除けば、肌は（あまり）傷ついていない。メルは自分に与えられている布にくるまって天幕の隅に身を横たえ、夕食はきっともらえるだろうと、それだけを望みながら身体を休めた。足首に鎖をつながれているのにも、それくらいの仕打ちに屈辱は感じなくなっていた。

翌日も、メルはΠの字形の柱に磔けられた。ただし、上下逆に。昨日と同じ『道具』が並べられたが、出入口の部分にも縄が張り足されて、誰も入れないようにされていた。立札が取り替えられたが、昨日とは違って、何が書いてあるかを見せてもらえなかった。

逆さ磔にされていては、それだけで頭がガンガンしてくる。

アンドロは、まだ帰っていない。連れ去られた先で、何をしているのだろう。少年として扱われているのか、少女としてなのか……だんだん増えてくる野次馬を見るともなく眺めながら、そんなことをぼんやりと考える。自分への心配は、なぜか希薄だった。というよりも。また鞭打たれ模造淫茎を突っ込まれることなど、考えたくもなかった。

やがて。歓声と拍手。野次馬が開けた道を曲馬乗りの少女四人が、身体の線を浮かび上がらせた全身肌着に短い裳裾という舞台衣装で近づいて来て、ひらりと縄張を跳び越えた。

レインボウ曲技団の女たちは、半数以上が姉妹だった。鳥人間のアマンダとミランダ。猛獣使いのカーマとラーマ。空中ブランコのアンディとインディにいたっては、両親だけでなく夫までが同じだ。しかし、この四人は赤の他人同士。名前もばらばらで、ミミー、ノエル、コレット、カレン。そういったことを、この三日間でメルは知っていた。もっとも、先に挙げた名前が本名なのか芸名なのかは知らない。向こうだって、メル・ジーン・ライアンの名は知らない。ここでは、その名で呼ばれたことなどないのだから。

四人が縄張の中で横一列に並ぶと、後ろに続いていた道化師が四本の松明を両手を使っていっぺんに投げて、少女はその場から動かずに（手は伸ばしたが）一本ずつを受け取った。このあたりも、見世物めいた演出だった。演出は続いて。四人が横並びになって、松明を扇の要のように重ね合わせると、道化師が燐寸で点火する。

四人は松明を掲げてメルの左右に――二人は立って、二人は跪いた。そして一斉に、松明をメルの身体に押し当てた。

というのは、正確ではない。すれすれに近づけて、すぐに遠ざけたのだった。

ちりちりっと小さな音が爆ぜて、淫毛と腋毛が燃え上った。

「きゃああっっ……？！」

メルは叫んだが、それは『燃やされる』という恐怖からの悲鳴であって、肉体に受けた苦痛は軽微だった。火脹れが出来るほどの火傷を負う暇もなく、毛に燃え移った火はすぐに消えた。逆さ磔にされているおかげで、髪の毛は焼けていない。

四人は松明を地面に突き刺して、腰に手挟んでいた乗馬笞を手に取った。

ぴしっ、ぱちっ……燃え滓を叩き落としていく。

「……」

メルは無言で、されるがままになっている。団長のはもちろん、昨日の『客』たちの笞よりも軽い。股間も打たれているが、わざと淫裂に食い込ませてきたりはしない。

笞打たれた肌は、軽い火傷のせいもあって、遠巻きの野次馬から見ても、はっきりと赤い。短く燃え残った毛も少なくない。

四人は、また松明に持ち替えて。今度は演出を加えず、丹念に燃え残りを焼き払っていった。そして。道化師が準備しておいた小さな桶を持ってメルを取り囲んで。

ざばあっ……水をぶっ掛けた。

「ぶふっ……げほっ」

顔にも水を浴びて、メルが咳き込む。

それを合図にしたかのように、四頭の仔馬が駈け込んで来て、縄張のまわりをゆっくりと巡る。

四人は松明を投げ捨てて縄張に駆け寄り。

「はいっ！」

縄に跳び乗った反動でさらに高く跳んで、すとんと鞍に跨った。煽情的嗜虐的な情景から一転しての軽やかな妙技。

一拍を置いて、拍手と口笛。四人は片手を高く上げて歓声に応えながら駆け去った。その間、メルは忘れ去られていた。

しかし、すぐに野次馬の関心は、すっかり剥き身にされた逆さ磔の生贄に戻される。

縄張の一画が解放されて、受付の机が据えられ、立札も昨日の物に戻されていた。

メルへの新たな『北風』が吹き始める。

アンドロが帰って来たのは、夕刻になってからだった。正確には、返却されたというべきか。

一頭立ての荷馬車が木箱を亜人天幕の前に置き捨てて。団長の立ち合いで開けてみると、アンドレが詰め込まれていた。両手は後ろ手にねじ上げられ、箱の中に正座して上体をいっぱいに折り曲げたＺ字形に折りたたまれ、ぐるぐる巻きにされていた。全身に夥しい数の鞭跡が刻まれ、女性器にも肛門にも血がこびり付いていた。男性器には――煙草を押し付けられた火傷。

「酷い目に遭っちゃった。向こう十日くらいは休ませとくれよ。それくらいは貰ったんでしょ」

アンドロは、案外にけろりとしていた。

そんな彼娼を、メルはしたたかとは思わなかった。精一杯の抗議、そんなふうに思えるのだった。

※続きは製品版でお楽しみください。

著　者：濠門長恭
表紙絵：藤間慎三
発　行：ＳＭＸ工房
ブログ：https://goumonchoukyou.jp/